



東京タワー

私が初めて東京タワーを見たのは小学校の校長室でした。6年生のお兄さんお姉さんが卒業記念に作った模型です。低学年の私よりちよつと背の高い東京タワーでした。骨格から細部まで木で組み上げ、鮮やかな赤い色のペンキで綺麗に仕上げてありました。

本物の東京タワーを見たのは高校の修学旅行の時です。真っ青な秋空に映える鮮やかな赤い色に、あの校長室の東京タワーを思い出していました。模型を作ったお兄さんお姉さんは、中学を卒業して都会へ就職していきました。集団就職という言葉があった時代です。この東京の「何処か」にも、あの時のお兄さんお姉さんがいるのです。私は東京タワーに昇つて、眼下に果てしなく広がる街並みを眺めながら、その何処かを探していました。

近所のお姉さんも就職していきました。お姉さんは小学校から帰ると、直接私の家に来て、小さな私をおんぶして夕方まで過ごし、夕飯も一緒に食べて帰るのです。私はそのお姉さんを「こうちゃん」と呼んで、一緒に過ごすのがとても楽しいひと時でした。でも時間が過ぎて別れが来ました。こうちゃんは、中学の卒業式の数日後に集団就職で郷里を出ることになっていたのです。

旅立ちの日、船着場に行きました。数十人の集団就職の人たちの中に、こうちゃんがいました。私を見つけると小走りに駆け寄り、私を抱き上げ頬擦りして泣きました。私も「行くな、行くな」と泣きじゃくって船を見送りました。絶望の底に落とされたような気持ちでした。

「金の卵」として都会に迎えられたお兄さんやお姉さんは、本物の東京タワーを見て何を思ったのか。何年かに一度、お盆やお正月に帰省してきました。こうちゃんも時々帰ってきました。私はその日が待ち遠しくて仕方ありませんでした。でも月日がたち帰省してくるたびに、お兄さんお姉さんの様子は少しずつ変わっていきました。そして、こうちゃんに対する気持ちもいつの間にか遠くなっていったのです。

戦後の経済成長期、時代の繁栄の象徴が東京タワーでした。でも修学旅行で見た東京タワーは、私たちから「何か」を失わせていく象徴のようにも見えました。そして時の移り変わりは激しく、私の郷里も変わっていきました。お兄さんお姉さんたちの実家も途絶える家が多く、こうちゃんも結婚して遠くで生活していると風の便りで聞きました。そして病死したことも、ずいぶん後になって知ったのです。

いつの間にか人と人のつながりがなくなり、みんな孤立して寂しい時代になりました。都会も私の郷里も同じです。お兄さんお姉さんの世代の中から、死んだら山や海に捨ててくれと言う人も出てきました。一人一人の生の重み、尊厳はどうなってしまったのでしょうか。私たちが作り上げてきた時代そのものが、人間としての感覚を失わせてしまったのかもしれない。

小学校は老朽化し、私が二十の頃取り壊されて高台に移転しました。校長室にあった東京タワーはどうなったのか。同窓会で新校舎を訪ねた時、何処にもそれらしきものはありませんでした。今はその校舎も古くなって過疎の少子化で小学校も将来は統廃合されていくようです。

海法龍 かいほうりゅう

1957年、熊本県天草市生まれ。大谷大学真宗学科学科卒業後、大谷専修学院卒業。真宗大谷派長願寺(横須賀市)住職。真宗大谷派首領部國教化推進本部委員。著書に、伝道ブックス81「報恩の生活」(東本願寺出版)などがある。

